



TITLE:

星の光り

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 星の光り. 天界 1926, 6(66): 331-331

ISSUE DATE:

1926-06-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160561>

RIGHT:

皆さん。私は皆さんの親愛なる星の友達で御座います。御一緒に、ひろく天文を普及し、旁ら辭引博士をやつつけて、こんな事を間違へる様な人が、やがてはこの日本にだけでも一人も居なくなる様に、奮闘努力致さうではありませんか。私の話はこれ丈です。(をほり)

星の光り

それは單なる光りの點々である。形ちも無く、大きさも無い。たゞ微かな光りの、無茶苦茶な配列。——それが何故に此れほど人の心を惹きつけるのだろうか。

私は、時々、四條通りや寺町あたりの賑やかな夜の街頭を散歩する。はればれしい人の顔を迎える店々の電飾や、軒々に配列する燈火が、或は青く赤く或は白く黄いろく、一直線に列んだり、まるく輪を作つたり、人の智恵で考へられるだけの技巧をつくして光りを美化してゐる。——此の光りの海にたゞよう心で私は歩みを運ぶことが多い。しかし、其の時、幸ひに空が晴れてゐるならば、かうした人造光波と共に、天には星の光りが馴じみ深くまたゝいてゐる。私は、空を仰いで此の星の光りを捕へる瞬間心は平靜に歸つて、人造美と宇宙美とのコントラストに思ひふける。

人造の美は騒々しい、人造の美は靜かである。人造美は毒々しい、宇宙美は清く澄んでゐる。人造美は赤と黄とが勝つてゐる。宇宙美は白と青とが基調となつてゐる。人造美は當てつけがましい直線と曲線とで出来てゐる、宇宙美は無茶苦茶な列び方の中に實は誰でも考へさせる味を持つてゐる。人造美は材料が餘り多過ぎて技巧が足りない、宇宙美は簡単な基本材料であるが技巧は全く超越的である。——こゝろみに、暗夜街頭に立つて、有田ドラックの電飾と、春の中天にきらめく獅子の星座と見比べて見るが好い。人と超人との心理の差が最も端的に了解される。

もつと此のコントラストをまさに見るために、晴れた夜比叡の山頭に登つて見るが好い。脚下に見る京洛の夜の賑はひは、かうした觀察の未経験者には到底想像の出来ないほど興奮的なものである。しかし、一旦、眼を轉じて全天に列ぶ大小の星座を顧みるさき、そこには興奮が無くて落付きがあり、動搖が無くて規則正しい運行があり、淺薄がなくて奥深かさがあり、いやみが無くて何時までも見る人の眼を離させない魅力がある。

先年、比叡上に登つて人の世と天の世界とを鳥瞰した私は、一九二三年、南カリフォルニアのキルソン山に登つて全く同じ感じを深めたことがある。キルソン山の下には、半世紀の間に一寒村から人口百萬の都會に化したロス・アンゲレスと、米國第一の富豪別荘市街パサデナがある。山の上から見下す此等の市々の美は、金に飽かし、人智に飽かしたヤンキー式の豪勢ぶりを見せてはゐるが、しかし智恵無しに造られた星々の配列美には遠く及ばないと思はせられた。——山本一清(雜草苑)